



※要請書の内容は組合HPを参照

## 子どもが輝き、教職員が安心して働ける学校を

### 各市町教委と校長会への要請 (続編)

尾北教労は、6月から7月にかけて各市町教育委員会と管内校長会に前期要請を行いました。そこで示された各市町の状況や取り組みの要旨を前号に掲載しましたが、その続編を紹介します。

## 多忙化解消に向け さまざまな方策を

文科省が策定した勤務時間の「上限指針」では、「(時間外勤務時間が)月45時間超の職員をゼロにする」目標が掲げられています。

各市町教委からの説明では、45時間超の職員は減ってきているが、まだ45時間以上残業しなくてはならない多忙な状況があることが確認されました。尾北教労からは、土日を含めた勤務時間を正確に把握し、早く帰ることのみを求め「時短ハラズメント」が生じないよう要請しました。そして、具体的な多忙化解消の取り組みを進めるよう要請しました。

各市町教委からは「運動会は、来年度以降も半日で行う」、「4月の繁忙期は、

## 部活動の 負担軽減を

小学校は全学年5時間授業にして、年度当初の実務時間を確保した。「夏休みの作品募集は全て希望制としている」などの取り組みが聞かれました。

中学校の多忙化の主な原因が部活動であることは、多くの教員が指摘していることです。部活動は、生徒の精神的・肉体的成長につながる活動ですが、教員や生徒にとって負担も大きく、改善が望まれます。部活動は、勤務時間外に及び活動であり、多くの課題があります。尾北教労では、朝部活の廃止や、部活動の担当を押しつけないことなどを要請しました。

また、生徒については、ほとんどの中学校で、部活動は強制加入ではないことが、

各市町教委からの説明で確認されました。そして、文科省は、2023年度以降に、休日の部活動を学校から切り離し、地域移行を進めていく方針を示しています。尾北でも検討を始めている市町教委もあり、部活動の負担軽減に向けた、さらなる取り組みが求められています。

## 変形労働時間制 導入しない

政府が導入を図っている「1年単位の変形労働時間制」は、見た目上の時間外勤務の数字を減らすだけで、実際には多忙化をさらに進め、教員の健康や生活、家庭に弊害を及ぼす恐れがあります。

各市町教委からは「導入するつもりはない」という見解が示されました。変形労働時間制でなく、勤務時間内に仕事が終わられる勤務体制づくりが強く求められています。

## プール清掃 業者委託に

コロナ禍により2年間使用していないプールの清掃作業については、負担が大きく、危険も伴います。他市町ではプール清掃中の事故も報告されています。そのため、尾北教労は、プール清掃を業者委託するよう要請しました。

市町によっては、来年度に向け、プール清掃について検討していく方向を示したところもありました。

## 中学校制服 ブレザー選択

大山市の中学校では、制服について今年度より、男女ともに、ブレザーやスラックスを選択することができるようになりました。

また、ワイシャツではなくポロシャツを選択することもできます。動きやすく、気温や環境に合わせることが出来る服装ということで大変好ましいことです。

そして、これまでの「男子は学生服」、「女子はセーラー服」という慣習が改められたことで、多様な性への配慮にもつながります。

尾北の他市町でも、制服の選択制へ向けて検討を進めていることが確認できました。

## 給食費 無償化進む

子どもの貧困等への対策に向け、学校給食費の無償化が全国の自治体で広がっています。尾北では、すでに、大口町で「給食費を半額にする」、岩倉市で「第3子以降は、給食費を無償とする」となっています。

そして今年度から、扶桑町で新たに「第3子以降は、給食費を無償とする」施策が開始されました。子どもたちが、生活の不安を抱えることなく、安心して学校に通えるよう、さらに広がることが望まれます。

オンライン教育のつどい (8/19~22)

## 記念講演「教育の原点とは何か」

山極 寿一さん (京都大学前総長・総合地球環境学研究所所長)

ゴリラの研究を通して人間の本質を考えてこられた山極さんから、人間にとって教育や学びはどんな意味があるのかというお話を聞きました。以下に要旨を紹介します。

### ヒトの子ども期と青年期の危機を乗り越えるために

ゴリラはお乳をのむ乳児期、大人と同じものを食べる少年期、繁殖をする成人期、老年期がある。

ヒトには、それに加え、離乳後も自ら食物をとれず他人から食べ物を与えられないと生きていけない子ども期と繁殖能力があるのにそれをしない青年期(思春期)がある。これは人間だけである。

ゴリラは、生まれてから3~5年間、母親にくっついてお乳を飲んで育つ。しかし、ヒトは出産を何度も繰り返せるように離乳を早くした。早くから母親と離れてしまう。また、生後に脳の成長を最優先し、その後に一気に体を成長させる思春期には心身のバランスが不安定な状態になる。

この2つの危機を乗り越えるために、母親以外の他人がかかわる共同保育が必要になり、ヒトは家族と共同体をつくった。共同保育を可能にしたのが「共感力」であったという。

### ヒトの共感能力の発達

いつも母親にくっついてゴリラの赤ちゃんはほとんど泣かないが、ヒトの赤ちゃんはよく泣く。それは誰かに気付けてほしいという自己主張。周りの人が声掛けをすると笑う。みんなから愛されるために赤ちゃんは笑いかける。周りの人の声掛けに、赤ちゃんは言葉の意味を理解するのではなく、言葉のトーンを聞いてその人と一体感を持つ。

ヒトの能力である「共感能力」の発達によって、人間はあこがれを持つようになった。「〇〇のようになりたい」など、目標に向かって努力をするようになる。それを大人が後押しというか、ある意味おせっかいをするようになった。

人間として一人立ちするために親ではない他人が支えるシステムが教育であり、これは、人間にしかない進化の道であった。教育は、次世代への贈り物であり、無償の行為である。

### ヒトの進化の99%は、言葉がなかった

人間の脳が大きくなったのは、何が関係しているのだろうか。言葉をしゃべるようになり記憶量が増えた結果、脳が大きくなったと思われがちであるが、実はそうではない。言葉が現れたのは7万年前で、700万年のヒトの進化の99%は言葉がなかったのである。言葉は、脳が大きくなった結果であり、原因ではない。

ヒトの脳が大きくなった200万年前は、10~15人の家族集団で生活していた。今のスポーツ集団と同じ大きさ。身振り手振りでチームワークがつけられ、言葉はいらない。現代の人間と同じ脳の大きさになったのは40万年前。150人程の集団で、共同作業を一緒にする狩猟採集社会。100~150人というのは、顔と名前が一致して喜怒哀楽を共有した信頼できる仲間の集団である。

ヒトの脳は、群れが大きくなるほどに記憶の量が増え大きくなっていった。情報処理能力が必要になり、結果として、言葉によるコミュニケーションが発達したのである。

### 共感力こそがコミュニケーションの土台

言葉の前にはどんなコミュニケーションがあったのか。チンパンジーは目を合わせないが、ゴリラは顔と顔を近づけて遊びや交尾を誘う。ヒトも対面するが、距離を置いている。会話をしているから離れているわけではない。白目は、サルにもゴリラにもなく人間の目だけにあるもので、その白目の動きを見るために距離を取っているのであり、それでヒトは相手の気持ちを感じている。これは習わなくても生まれつき持っているものであり、共感能力を高めるためのものである。目を合わせたり手をつないだり抱き合ったりして気持ちを伝える。こうした共感力の上に言葉があるのであり、共感力こそがコミュニケーションの土台であった。

### 過去と全く違う未来を生み出せる力

農耕牧畜社会から現代にかけて、人間の集団はどんどん大きくなった。文字、電話、SNSと言葉を駆使して便利になったが、その分、言葉では伝わらない気持ちや感情の部分が置き去りにされているのではないか。人間の営みは、デジタル化できないものがたくさんある。安全は科学技術でつくられても安心はつくれない。安心は、人と人が繋がる信頼関係が必要である。人間は生産性や効率を求めるあまり、安心をつくり出す「共感力」を使わなくなったのではないか。

AIやインターネットの発達によって、膨大な情報から最適解を得られるようになった。知識を伝えるだけの教育はもう過去のものである。それは、AIやインターネットがやってくれる。現代の教育は、未知の世界がどうなるかをみんなで話し合うために、それを考える方法や実践の方法を学ぶことである。みんなで考え合うためには、個人の知恵を伝えるための、人間ならではの身体感覚や感性を生かしたコミュニケーションが大切になってくる。そうした共感力を使った学びがこれからは必要になってくる。答えのない課題があること、答えは1つでないことを知ることが大事であり、人間は、過去にしたことと全く違う未来をも生み出せる力を持っている。

### 言葉のない世界もいいもんだ

ゴリラは、10~15頭の家族の群れで生きている。ヒトもそういう時があった。言葉のないゴリラはうそはつかないし待ってくれる。世話を早く終わりたい飼育員の態度を見抜いて、わざと世話を焼かせたりもする。ゴリラは言葉ではなく相手の態度を見て気持ちを確かめて行動する。言葉がなくても共通の体験や共感によって相手との繋がりをつくったり理解したりすることができる。

山極さんの話を聞いて、人間は、ゴリラ以上に「共感力」を土台に、五感を使ったコミュニケーションに長けた動物であることが分かり、身体での触れ合いのコミュニケーションを情報技術に明け渡してはいけないと思いました。

「教育は、教える側が自分の不利益を自覚して利益を求めないもの、つまり、教育は次世代への贈り物である。見返りを求めてはいけない」と、山極さんは話されました。大人の都合で、大人や社会が求める人材を育てるのでなく、自分の夢を実現できる人間を育てることが教育なのだと思います。【Y.T.】